

仏さまや亡き方をご供養するとき、お線香やお焼^{しょうこう}香などのお香は欠かせません。

お線香は、お仏壇などの香炉^{こうろ}の真ん中に真っ直ぐ立て、そして合掌し、ご先祖さまへの感謝や亡き人への思いを^{めぐ}巡らせます。また、お墓参りにはお線香とお花を供えてお参りをします。

お葬式や法事でのお焼香で使うお香は、^{まっこう}抹香といいますが、^{そうとうしゅう}曹洞宗では都合二回のお焼香をします。先ず抹香を指でつまみ、自分の額^{ひたい}のあたりに押し^{いた}頂いて、炭の上^くに焼べます。これを一回^{ねん}拈じる香、一拈^{いちねんこう}香といいますが。そして二回目は、そのお香^{こう}の^{かお}香りが長く続くようにと、つまんだらそのまま最初に焼べたお香の^{こう}側^{かたわら}に添える、これを添え香^{そこう}といいますが。最初のお焼香が仏さまや亡き方のためのお香ですので、一拈^{いちねんこう}香のお焼香のときに、仏さまのこと、ご先祖さまのこと、亡き人のことを思いながら^{ていねい}丁寧に^{ていねい}お焼香をすることが大切なのです。ですから、一回のお焼香でも充分であり、たくさんお焼香をすればよいというものではありません。

さて、このお焼香につかう^{まっこう}抹香は、長い年月をかけて自然が^{つちか}培ってきた偶然の賜物である、様々な香りのする木、香木^{こうぼく}を細かくしたものです。白檀^{びやくたん}や沈香^{じんこう}など、ご存知の方も多いでしょう。

日本で一番有名な香木は、東大寺正倉院^{しょうそういん}の宝物^{ほうもつ}である「蘭奢待」(らんじゃたい)ではないでしょうか？正式には黄熟香(おうじゅくこう)といい、沈香^{じんこう}の中でも貴重とされる「伽羅^{きゃら}」という種類のさらに貴重な香木です。銀閣寺を作った足利義政^{あしかがよしまさ}や戦国時代の織田信長、そして明治天皇など、時の権力者たちだけが切り取ってその香^{かお}りをかぐことができたという話は有名です。この「蘭奢待^{らんじゃたい}」には三十八か所の切り取られた跡が残っているそうですが、それほど貴重なお香^{こう}はどんな香^{かお}りがするのでしょうか。一度かいてみたいものです。

このように、仏教では古くから仏さまやご先祖さまの供養のため、また時には人々の心を癒すために、お香が使われてきました。いま、アロマテラピーなど^{かお}香りを癒しに結び付けることが流行していますが、仏教では古来からお香による癒しを実践していたのです。

良きお香^{こう}の香^{かお}りを、仏さまや亡き方・ご先祖さまのために^{ささ}捧げ、少しでも気持ち

よく安らかに過ごせるようにと願い、供養をすることが私たち残された者のつとめなのではないでしょうか。

— 終 —